九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

モダニティとフェミニズム : ポストモダン・フェミニズムのジレンマ

土場, 学
九州大学比較社会文化研究科日本社会文化専攻・社会構造講座

https://doi.org/10.15017/8570

出版情報：比較社会文化. 2, pp.27-36, 1996-02-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『比較社会文化』第2巻（1996）27～36頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol.2 (1996), pp.27～36

モダニティとフェミニズム

── ポストモダン・フェミニズムのジレンマ ──

土場　学*

キーワード：ポストモダニズム，フェミニズム，ジェンダー，合理主義，相対主義

【要　旨】

ポストモダン・フェミニズムは，近代西欧の認識論，すなわち合理性／非合理性の二項対立を中軸とする合理主義的な認識論を，じつはそれが男性性／女性性の二項対立を中軸とする男性主義から生成されたものとして拒斥する．そのさい，ポストモダン・フェミニズムは，ポストモダニズムとフェミニズムの関係を，ポストモダニズムはフェミニズムにロゴセントリズムからの脱却の糸口を提供するに対し，フェミニズムはポストモダニズムにファロセントリズムからの脱却の糸口を提供する，という相互補完的な関係として捉える．しかし，モダニティとポストモダニティは宇宙／反宇宙のように完全に不親和であり，ゆえに，モダニティに対するポストモダニズムの戦略は，フーコーの戦略がまさにそうであるように，モダニティの外部からの「雑音」のインプットという形式にならざるをえない．しかし，フェミニズムがまさにフェミニズムであるためには，そのような戦略を選択するわけにはいかない．そこに，ポストモダン・フェミニズムのジレンマが存在する．

1．はじめに

モダニティは，フェミニズムにとってやっかいな代物である．というのも，モダニティは，フェミニズムの「母」であると同時に「敵」でもあるからだ．喩えは悪いかもしれないが，ある種の「エディプス・コンプレックス」がそこにはある．したがって，フェミニズムの主張には，それがどのような内容をもつものであれ，こうした「コンプレックス」が色濃く反映されているのを読み取ることができる．そしてまた，フェミニズムは「近代社会における男性支配の解体」という目標を共有しているにもかかわらず，その方法論については相対立する立場が乱立しているのも，このコンプレックスがいかに複雑で微妙な陰翳をもっているかを証示しているといえる．

しかしその一方で，こうしたコンプレックスは，なにもフェミニズムだけが抱えているものではない．近代社会に批判的に立ち向かおうとするすべての社会理論は，自らがこうしたコンプレックスを抱えていることを直視せざるをえない．フェミニズムは，その政治的要求が明確であるがゆえによりいっそう峻烈に対峙せざるをえない，ということにすぎない．しかしそうであればこそ，フェミニズムに対して政治的また学問的にどのような立場をとるにせよ，すべての社会理論にとってフェミニズムの取り組みから学ぶことは多いはずである．

ところで，モデニティに対するフェミニズムのこうした悪戦苦闘の最前線にあるといえるのが，最近勢力を増しつつある「ポストモダン・フェミニズム」である．ポストモダン・フェミニズムは，その名が示すとおりに，「ポストモダニズム」と結婚した「フェミニズム」であり，「近代社会における男性支配の解体」のためにポストモダニズムを伴侶として選択したフェミニズムである．その意味で，フェミニズムの諸理論の中ではもっともモダニティに対して敵対的な態度をとっている．すなわち，「母殺しも辞さない」というわけである．

本稿の問題意識は，簡単にいえば，こうしたポストモダニズムとフェミニズムの結婚がはたして幸多きものなのか不幸なものなのか，ということである．周知の通り，この問題に関しては，現在，フェミニズムの内部において侃々諤々の論争が繰り広げられている．しかしながら，そこでの論争を俯瞰してみると，多くの論者はこの問題の底の

＊日本社会文化専攻・社会構造講座

深さを測り損ねているように思われる．そして，あらかじめいってしまえば，この問題に関する本稿の見通しは「悲劇的」である．すなわち，フェミニズムにとってポストモダニズムはふさわしい伴侶とはいえない，というどころか，そもそもそれらは出会うことすらかなわないだろう，というのが本稿の主張の骨子である．

2．ポストモダン・フェミニズムのモダニティ批判

2.1．ロゴセントリズム＝ファロセントリズム

「女性史の立場から〈近代〉をどう評価するかは極めてアンビヴァレントな問いである．一方には〈近代〉を女性にとって解放的であるとする立場があり，他方には〈近代〉を抑圧的であるする立場がある．前者を解放史観，後者を抑圧史観と名付けよう．」（上野,1994:125）しかし，解放史観に立つにせよ抑圧史観に立つにせよ，近代社会をまるごと肯定するようなフェミニストは存在しないはずである．フェミニズムは，多かれ少なかれ，近代社会批判の思想である．そのさい，さしたありは，解放史観は近代社会の肯定的側面を，抑圧史観は近代社会の否定的側面をそれぞれ強調しているにすぎない．いずれにせよ，フェミニズムは基本的には近代社会批判の思想である，というかぎりにおいては，「フェミニズムは本質的にポストモダン」（江原,1991:227）といえなくはない．

ただし，そこにおいて，近代社会のどのような側面を捉えて「ポストモダン」が唱えられているのかは問題である．女性の立場からみれば，近代社会を特徴づける数多くの側面の中でもとりわけ女性の抑圧の原因となる側面を矯正した社会が「ポストモダン」の社会である，という定義づけはもちろんありうる．たとえば，女性からみて近代社会の産業主義，資本主義，家父長主義が諸悪の根源であるならば，女性にとって首肯しうる「ポストモダン」の社会とはポスト産業主義，ポスト資本主義，ポスト家父長主義の社会である，ということになるだろう．しかし，あらかじめ断っておけば，本稿ではそのような意味で「ポストモダン」という言葉が使われるわけではない．本稿では，「ポストモダン」という言葉は，そのもっともラディカルな意味において，すなわち，モダニティの根本規範とでもいうべきものの否定として用いられる．したがって，ポストモダン・フェミニズムとは，そうしたモダニティの根本規範を否定するフェミニズムのことである．

それでは，モダニティの根本規範とはったい何か．それは，「合理主義」である．すなわち，合理主義はモダニティのcategorical imperativeである．したがって，近代社会についての諸々の言説は，その表層がどのように粉飾されていようとも，合理主義に対する態度によってその内実を見きわめることができる．

この点を踏まえていうならば，近代社会に対する批判的な言説は，合理主義を基本的に肯定するモダニティに内在的な批判と，合理主義を基本的に否定するモダニティに外在的な批判の二つに分類することができる．つまり，前者は「モダニストによる近代社会批判」であり，後者は「ポストモダニストによる近代社会批判」である．そして，前者の論陣を先導するのがハーバーマスで，後者の論陣を先導するのがデリダ，フーコーらいわゆるポスト構造主義者たちである．もっとも，それぞれの陣営の鼻祖にまで遡るならば，前者がマルクス，後者がニーチェというのが定説となっている．したがっていうまでもなく，ポストモダン・フェミニストは，後者の陣営に参集するフェミニストである．

しかしながら，一括して「ポストモダン・フェミニズム」とラベリングされてはいても，ポストモダニズムとフェミニズムとの関係についてはその内部に微妙な温度差がみられる．ただし，ここではまず，両者の関係にもっとも肯定的な態度をとるフェミニストの一人であるスーザン・ヘックマンの『ジェンダーと知』（Hekman,1990＝1995）における議論を橋頭堡として，ポストモダン・フェミニズムの主張を精査してみることにしよう．ちなみに，そこでのヘックマンの論証は，ポストモダンふうのレトリカルなスタイルではなく，きわめてロジカルなスタイルでなされている（そしてついでにいえば，このことからしてすでにポストモダン・フェミニズムのジレンマの一端が露呈している）．

ヘックマンが捉えるところによれば，ポストモダニズムとフェミニズムとは「相互補完的に修正し合う」関係である．すなわちまず，ポストモダニズムは，近代西欧思想の基層をなす啓蒙主義を全面的に否定する．つまり，近代西欧の啓蒙主義が崇拝する合理性，主体性，自律性といった諸観念はもはや玉座から降りねばならず，知の基礎づけに偏執するロゴセントリックな認識論は脱構築されねばならない，とポストモダニストは主張する．そして，こうしたポストモダニストの主張は，フェミニストに男性支配解体のためのもっとも有力な理論武装を提供する．なぜなら，合理性，主体性，自律性の称揚は，つまりはそれらの観念によって定義づけられる人間＝男性の称揚であり，その裏にはそれらと二項対立するものとしての非－合理性，非－主体性，非－自律性の蔑視，つまりはそれらの観念によって定義づけられる非－人間＝非－男性＝女性の蔑視が不可避的に随伴しているからであり，ゆえにこうした二元論が刷り込まれた近代西欧の認識論を打破してこそ，男性による女性の支配という権力構造をその根底から変革することができるからである．しかし逆にまた，フェミニストは，こうした二元論はそもそも男性性／女性性の二元論を生成

母体としたものであることを指摘することで，多くのポストモダニズムの言説にみられる「ジェンダー盲目性」を矯正することができる．

要するに，ポストモダニズムは，フェミニズムに人間主義およびロゴセントリズムからの脱却の糸口を提供するに対し，フェミニズムは，そうした人間主義およびロゴセントリズムがじつは人間＝男性主義に淵源するものであることを指摘することで，ポストモダニズムに男性主義およびファロセントリズムからの脱却の糸口を提供する，という関係がそこに成り立つ．つまり，「ポストモダンは，啓蒙思想の二元論の誤りに気づくが，フェミニズムがこの二元論がジェンダーによるものだと定義することで完成させている」（*ibid.*：訳 20）わけである．ちなみに，こうした認識は，ラカンの「ファロゴセントリズム」に対するデリダの批判をそのまま継承しているといえる．

2.2. ポストモダン・フェミニズム VS モダン・フェミニズム

ところで，フェミニズムは，その理論的な立場からみれば，リベラル・フェミニズム，マルクス主義フェミニズム（社会主義フェミニズム），ラディカル・フェミニズム，そしてポストモダン・フェミニズムに大きく分かれる，というのが通説となっている．じつは，ヘックマンは，ポストモダン・フェミニズムを唱道する立場から，それ以外のフェミニズム（以下では便宜的に「モダン・フェミニズム」と呼ぶ）を近代社会の男性支配の構図を永続化させるだけだ，と痛烈に批判している．そして，そうした批判の根底にある論拠がもっともよく表れているのが，合理性／非合理性と男性性／女性性との関係をめぐるヘックマンの議論である．

そのさい，彼女の議論はきわめて単純明快である．まず，ヘックマンによれば，次の点に関してはフェミニストの見解は一致しているという．すなわち，近代西欧の認識論は合理性／非合理性という二項対立を土台としていること，合理性／非合理性の二項対立には前者の優位と後者の劣位という価値づけが含意されていること，合理性／非合理性の二項対立は男性性／女性性という二項対立と対応づけられていること，したがってこれらのことから男性性の優位と女性性の劣位が帰結すること，である（ヘックマンはそうした図式を「合理性の男性的定義」と呼んでいる）．しかし見解が分かれるのは，そうした図式をどう克服していくか，という問題に関してである．ヘックマンによれば，この問題に関しては三つの立場がありうる．第一の立場は，合理性／非合理性という二項対立，および前者が優位で後者が劣位というその価値づけは受け入れるが，それと男性性／女性性という二項対立との対応づけは拒否する，というものである．これは，リベラル・フェミニズムおよびマルクス主義フェミニズムの立場である．第二の立場は，合理性／非合理性という二項対立，およびそれと男性性／女性性という二項対立との対応づけは受け入れるが，前者が優位で後者が劣位というその価値づけは拒否する，というものである．これは，ラディカル・フェミニズムの立場である．第三の立場は，合理性／非合理性という二項対立そのものを拒否する，というものである．これは，ポストモダン・フェミニズムの立場である．

第一の立場は，ヤングの分類にもとづくならば，「人間主義フェミニズム（humanistic feminism）」の立場である．この人間主義フェミニズムの要求は，つまるところ，これまで男性のみに参画することが認められてきた合理性，主体性，自律性の領域，すなわち政治－経済システムの領域を女性にも開放せよ，というものにほかならない．そして，この人間主義フェミニズムに括られるリベラル・フェミニズムとマルクス主義フェミニズムは，女性の解放を資本主義（自由主義）政治－経済システムの枠内で可能とみるか否かという点で鋭く対立してはいるものの，たとえ究極の理想状態にすぎないにせよ，いっさいの権力構造からの女性の「解放」は理論上は可能である，と考える点で共通している．こうした考えが，「真理による人類の解放」という十八世紀的な啓蒙主義的合理主義をそのまま受け継いでいることはいうまでもない．したがって，この人間主義フェミニズムはモダニティの正統を継承するものであり，ヘックマンの図式に従えばそれは人間主義＝近代主義＝男性主義のフェミニズムということになる．

それに対し第二の立場は，再びヤングの分類にもとづくならば，「女性主義フェミニズム（gynocentristic feminism）」の立場である．この女性主義フェミニズムの要求は，つまるところ，男性性としての合理性が優れたもので女性性としての非合理性が劣ったものであるという価値序列を転倒させ，これまで非合理性という侮蔑的レッテルを貼り付けられてきた諸々の女性性（情緒性，関係性，養育性，母性など）を男性性としての合理性よりもむしろ優れたものとみなすべきだ，というものにほかならない．もちろん，こうした要求の背後には，大量殺戮兵器や環境問題など近代社会が抱える諸々の矛盾は，男性性としての合理性への盲目的な信仰に淵源する，という認識がある．したがって極論すれば，近代社会における「男性性支配」の構図を「女性性支配」の構図に変えない限りこうした矛盾は解消しえない，ということになり，それは結局，来るべき「女性主義社会」の建設を目指す，ということになる．ところで，ヘックマンも指摘しているように，こうした女性主義フェミニストの主張が，その上面だけをみるならば，それと敵対しているはずのアンチ・フェミニストの主張と

奇妙にも契合することは興味深い．というのも，アンチ・フェミニストも，男性性／女性性という二項対立を確認した上で，情緒性や母性といった女性性を賞美し，女性たちがそうした女性性を涵養していくことを推奨しているからである．とはいえ，こうしたアンチ・フェミニストの主張には，男性に対する「従順」というのもその賞美されるべき女性性に含まれていることはいうまでもない．

2.3．合理性／非合理性の脱構築

さて，ヘックマンは，こうしたモダン・フェミニズムは結局のところその意図に反して近代社会の男性支配の構図を永続化させることになるだけだ，として厳しく斥ける．そしてその理由は，要するに，モダン・フェミニズムは問題の根が合理性／非合理性という二項対立そのものにあることを見落としている，ということに尽きる．つまり，近代社会における男性支配の源は，合理性／非合理性という二項対立を中軸とした近代西欧の合理主義的な認識論にあるのに，モダン・フェミニズムはそうした認識論を前提にして自らの主張の正当化をはかってしまっているので，それはどうあがいても男性支配の構図の内側に留まらざるをえない，というのがヘックマンの主張の要旨である．

ヘックマンの主張は要約すればこういうことだが，より詳しくみてみると，その論証はいわば二段構えで構成されていることがわかる．すなわちまず，ヘックマンによれば，モダン・フェミニズムがそもそもその理論的基盤のレベルですでに破綻していることを明らかにしたのは，ポストモダニズムの貢献である．すなわち，「哲学の脱構築」の企てとしてのポストモダニズム（ポスト構造主義）は，近代西欧のデカルト以来の「認識論」，すなわち知の基礎づけにこだわる「(大文字の）哲学（Philosophy)」がもはや容認しえないものであることを完膚なきまでに論証した．ただし，こうした議論そのものはさしあたり哲学内部の問題にすぎないとみなすことはできる．しかしその場合でも，それによってモダン・フェミニズムの依って立つ理論的基盤そのものが堀崩されたことだけは疑いえないはずである．

しかしながら，ポストモダニズム（ポスト構造主義）は，確かに合理主義的な認識論が破綻していることを明らかにしたものの，なぜそうした合理主義へのオブセッションが近代西欧の文化をこれほど長きにわたって支配してきたのか説明できていない，とヘックマンは主張する．そこで，ヘックマンにいわせれば，そうした合理主義へのオブセッションが，その外装を剥ぎ取ってみるならばじつは男性主義へのオブセッションにほかならないことを看破したところに，フェミニズムの貢献がある．つまり，「ポストモダンが症状を扱っているだけの批判であるのに対して，フェミニズム批評は原因に言及していることでよりラディカルである．女性が非合理的で男性が合理的だとされるのは，啓蒙思想のあらゆる二元論が基本的に男性と女性の二元論によって規定されているという底に流れる問題が症状として出ているということである．」（*ibid.*：訳 62）したがってヘックマンにしたがうならば，モダニストは，まずはポストモダニストによって「対症療法」を施され，次いでフェミニストによって「原因療法」を施されなければならない患者である，ということになる．とすると，モダン・フェミニストは，自ら合理主義という病に犯されてしまった医者，ということになるだろうか．

結局，フェミニズムが立ちゆくためには，合理性／非合理性の二項対立，およびそれを囲繞する諸々の二項対立はことごとく払底されなければならない，というのがヘックマンの最終的な，そして妥協の余地のない結論である．「すなわち，合理／非合理の二項対置にはジェンダーによる意味づけが入っており選択の余地はない．むしろジェンダーによる意味づけは認識論のすべての次元に吹き込まれている．女性を理性と道徳に関して無能であると規定するばかりか，女性のまさにアイデンティティをも疑問に付すのが，この認識論にほかならない．この認識論の『長所』を保持しようとするリベラル・フェミニストは，その性差別は拒否しているのだが，その性差別の根っこの深さを誤解している．女性があまり合理的でも，道徳的でも，さらにいうならば人間的でもないと規定している認識論が，女性に地位を与えるほどの修正をそう簡単にできるはずはない．だとすれば完全に退けなければならないはずだ．」（*ibid.*：訳 117）

3．ポストモダン・フェミニズム論争

3.1．相対主義 VS 本質主義

当然予想されるように，ヘックマンが唱道するような「ラディカルな」ポストモダン・フェミニズムは，多くのフェミニストからの批判ないしは反発を被っている．そのさい，ポストモダン・フェミニズムに対する批判は，局所的には数多くの論点についてなされてはいるものの，大局的にはただ一つの論点に収束してくる．すなわちそれは，ポストモダン・フェミニズムにおける「相対主義」についてである．つまり，ポストモダン・フェミニズムに対する批判のほとんどは，要するに，ポストモダニズムは相対主義であるのに対し，フェミニズムは相対主義であってはならない，という主張に集約できる．そしてもちろん，ヘックマンらポストモダン・フェミニストもこうした批判があることは十分承知している．そして，彼女らは，そうした批判に対して，そのような発想のもとでしか語れないところにモダニストの救いがたい「本質主義」が露呈している，と切り

返している．ともかく以下では，こうしたポストモダン・フェミニズムをめぐるやや堂々巡り的な論争を大まかに俯瞰してみることにしよう．

ポストモダニズムに関してモダニストが絶対に容認できないのは，その相対主義である．ただしここで，相対主義とは，さしあたり，知識に関して真と偽を判定するための合理的な基準は存在しない，という見解（認識論的相対主義），および，倫理に関して善と悪を判定するための合理的な基準は存在しない，という見解（正義論的相対主義）である．モダニストの側からは，ポストモダニズムはこれらの意味での相対主義を主唱するものと解されている．そしてポストモダニズムがこのようなものと解されているかぎり，モダニストがポストモダニストに妥協する余地はまったくないといえる．

モダニストからみれば，フェミニズムの魂は近代社会に対して「批判的」であるところにこそある．そして，そうであるためには，知識と倫理に関する（最低限の）合理主義は把持していなければならない．なぜなら，フェミニズムは，近代社会のリアリティを構成している男性性／女性性の二項対立が正しくないことを論証する責務を負っているからである．したがってまた，フェミニズムは，そうした知識と倫理に関する（最低限の）合理主義を拠り所にして，最広義における「批判理論」を構築しなければならない．すなわち，より具体的にいえば，フェミニズムは，男性性／女性性のジェンダー・カテゴリーが現実の社会の中で構造化・制度化されていくメカニズムについての「記述理論」をもたなければならない．そしてまた，そうした社会構造・社会制度が不正なものであることを明らかにし，公正な社会構造・社会制度がいかなるものであるかを示し，それを実現するための実践のプログラムを提示しうる「規範理論」をもたなければならない．ちなみに，こうした「批判理論」のスタイルをもっとも体系的に確立しえたのは，いうまでもなくハーバーマスである．ただしもちろん，フェミニズムの「理論」が必ずしもハーバーマス的である必要はない．いずれにせよ，そうした「理論」を構築する営みを最初から放棄してしまうならば，フェミニズムの主張がニヒリズムの暗闇の中で矮小化され無害化されてしまうことは火をみるより明らかだとモダニストは考える．

しかしながら逆に，ポストモダニストからみれば，こうした発想そのものが「本質主義」の痼疾に救いがたく犯されている．すなわち，モダニストの発想のもとでは，必然的に，男性性／女性性の構造化・制度化のメカニズムを個別的な状況や文脈を無色化した「理論」のなかで同定せざるをえない．それゆえ，その理論の妥当性を主張するためには，個別的な状況や文脈が「偶然的」なもので理論の中で同定されたジェンダー化のメカニズムこそが「本質的」なものであると強弁せざるをえない．そしてさらに，まさにフーコーの慧眼が見抜いたように，こうした理論は，現実社会の中において，意図しようと意図しまいと，そこで同定されたジェンダー化のメカニズムを「本質化」して人びとを知 ── 権力の網の中に篭絡していくことになるだろう．

そもそも，ポストモダニストにいわせれば，「理論」によって人間と社会のありさまを眺望し切ろうというロゴセントリックな野心そのものが，じつはファロセントリズムの一つの症候にすぎない．したがって，フェミニストがなすべきことは，女性が主体でありうるような新たな「理論」を創り出すことではなく，「理論の機械装置そのものを故障させ，あまりにも一義的な真理と意味との生産への理論の自負を中断させること」である（Irigaray,1985:訳 95）．そして，そのための具体的な戦略としては，男性の「理論的な言説」に対して，それと対抗するのではなくそれを覆してしまうような女性の「流動的な言説」を投入することである．「フランスのフェミニストは西欧合理性とそのファロクラティック〈男根中心的〉な前提を批判しているが，その中心課題は，女性の抑圧が言語に根差すものであるということである．ファロクラティックな言語は女性に二つの選択肢しか与えない．つまり，女性のように話すことができるか，つまり非合理的に話すことか，あるいは男性の合理的な領域に入り，女性としてではなく，男性として話すのかのどちらかである．フランスのフェミニストたちが奮闘していたことは，これらの相互に容認できない選択肢のどちらも避けるということであった．つまり，ファロクラティックな言語宇宙の中に女性の空間を切り開くことであった．しかしながら，そのような努力はそれ自体ラディカルで革命的なことであった．」（Hekman,*op.cit.*:訳 83）

3.2．ポストモダン・フェミニズムの「理論」？

しかしながら，再びモダニストに反論させるならば，こうしたポストモダニストの反本質主義は，フェミニズムそのものに対して「革命的」になってしまうことになる．つまり，多くのモダニストが危惧しているのは，ポストモダニストの行き過ぎた反本質主義はフェミニストのフェミニストたるゆえんである規範的土台をも堀り崩してしまう，ということである（Soper,1989; Lovibond,1989; Harding,1990; Hartsock,1990; McNay,1992; Fox-Genovese,1993; Farganis,1994）．たとえば，ゾーパーは，ポストモダニストの反本質主義は，女性の抑圧は不正である，というフェミニズムの中心命題を瑣末化してしまうことを指摘する．つまり，ポストモダニズムは，フェミニズムの見解をそのほかの諸々の「偏見」とまったく同等のものとして扱われることを拒否できなくしてしまい，それは結果として，いかなる偏見をもつのも個人の自由という新

保守主義的なリベラリズムに合流していくことにならざるをえない（Soper, *op. cit.*）．また，ハーディングは，フェミニストが何らかの認識論をもつことは，自らの見解の「正当化の戦略」として不可欠であることを指摘する．したがって，フェミニズムにとって肝要なことは，近代西欧の啓蒙主義とともに認識論そのものを流し去ることではなくて，フェミニズムの正当化の戦略として「フェミニストの認識論」を構築することである（Harding, *op. cit.*）．

ところで，ポストモダン・フェミニストの中には，ポスト構造主義に心酔するフランスのフェミニストほどは「理論」に対して敵対的な態度を取らない論者ももちろんいる．たとえば，フレイザーとニコルソンは，「（大文字の）哲学」，すなわち近代西欧の合理主義的な認識論はフェミニストにとって有害無益であることを認めてはいるが，そうした意味での「哲学」がなくとも，男性性／女性性の構造化・制度化のメカニズムを説明するための「理論」は構築できるし，また構築しなければならない，と主張している（Fraser & Nicholson, 1990）．そのさい，彼女たちがもっとも気にかけているのは，性差別は長い歴史にわたって多くの社会や文化に広く深く浸透している，という明白な事実を説明するためにはどうしてもそれなりに大規模な「理論」が必要である，ということである．しかしそれは，常に，チョドロウやギリガンの「理論」に垣間みられるような「本質主義」に陥落していく危険性がつきまとう．したがって，フェミニストは，そうした本質主義に陥るのを慎重に回避しつつ広範な時空間的スケールのもとで妥当する「理論」を構築するという険しい峻路を歩んでいかなければならない．そのさい，フレイザーらは，ポストモダン・フェミニズムの「理論」のイメージについて，次のように述べている．「総じていえば，ポストモダン・フェミニストの理論は，プラグマティックで可謬的なものとなるだろう．それは，その方法とカテゴリーを手近な特定の仕事に適するように仕立てることになるだろう．そしてそのさい，それは，適切とあらば多元的なカテゴリーを使用し，ある単一のフェミニストの方法であるとかフェミニストの認識論であるとかに寄りかかる形而上学的な安寧を求めることは断固として拒絶するだろう．手短にいって，この理論は，ある単一の色の糸で編み上げられた織物というよりは，多くの異なる色の糸で編み上げられた織物のようであるだろう．」（*ibid.*：35）

しかしながら，マックネイは，こうした「折衷主義的アプローチ」は最終的には失敗に終わるだろう，と厳しい評価を下している（McNay, *op. cit.*：121）．すなわち，マックネイは，フレイザーらは結局，ポストモダン・フェミニズムの「理論」とはどのようなものかについてごく一般的な用語で示しうる以上のことは何も明らかにしていないし，また明らかにしえないだろう，と指摘する．そしてそれは，フレイザーらがフェミニストとして本当は秘かにその普遍性を信じているはずの規範とポストモダニズムの立場とが根本的に相容れないことに由来する，とマックネイはみている．「大規模な社会理論を拒否するかそれとも保持するかをめぐる彼女らのためらいは，フェミニズム理論の規範的支柱と，ローカルで文脈的なものに特権を与えるポストモダンの立場とが必ずしも噛み合うわけではないことに関する不安の表出として解読できる．」（*ibid.*：121-2）そしてまた，マックネイは，ポストモダン・フェミニズムをめぐる論争を概観して，次のように結論づけている．「現代フェミニズムの規範的基盤をめぐるジレンマに対してポストモダニストが与える解答に懐疑的なフェミニストの間には，次のようなある確かな見解の一致が存在することが見いだせる．すなわち，啓蒙主義の諸価値は，それが潜在的にある特権化された男性の観点に依拠し，それを正当化するときに限り問題的である．しかし，総じていえば，もしフェミニストが，女性の抑圧は不正である，というその主張に道徳的力を確保しようとするならば，改革的行為と抑圧的行為の識別を可能にする，何らかの形式での正当化のための合理性は把持しなければならないのである．」（*ibid.*：129）

4．合理主義と相対主義

4.1．外在的合理主義と内在的合理主義

こうしてポストモダン・フェミニズムをめぐる論争を鳥瞰してみると，モダニストとポストモダニストとの間では妥協はまったく不可能であることが容易に看取できる．そして，これはある意味で当然である．というのも，そもそもお互いに相手の立論の前提を否定しているからである．しかし，もしモダニストとポストモダニストとの間にそうした不毛な論争しか展開しえないとなると，それがなにゆえそうなのかということについては，もっと掘り下げて考えてみる必要がある．そのためには，まず，論争において賭けられている諸概念，とりわけ合理主義という概念について，僻論を避けつつより慎重に吟味しなければならない．

モダニズムは合理主義でポストモダニズムは非合理主義である，というのは，表面的にはたんなる臆断として片づけることは容易である．ただし，そこでいわれている合理主義がいかなる内実をもつものであるかは問題である．そのさい，まずさしあたりは，合理主義とは，知識に関する真と偽の判定のための合理的な基準は存在する，という見解（認識論的合理主義），および，倫理に関する善と悪の判定のための合理的な基準は存在する，という見解（正義論的合理主義）であるとみなすことができる．ただし，ポ

ストモダニストが非難の槍玉に挙げていることが明白な合理主義とは，もっと強い意味での合理主義である．すなわちそれは，知識や倫理に関していかなる観点（概念図式）からも独立な合理性の基準が存在する，という見解としての合理主義である．これは，パトナムの表現を借用すれば，知識や倫理に関する「神眼の真理（正義）」または「無眼の真理（正義）」がある，という見解にほかならない（Putnam,1981：訳 79-80）．いうまでもなく，十八世紀的な啓蒙主義的合理主義とは，こうした強い意味での合理主義，いわば「外在的合理主義」である．さらにいえば，こうした外在的合理主義は，「真理による人類の解放」という啓蒙主義の進歩史観を支えるもっとも太い柱であった．

ともかく，ポストモダニストが批判しているのがこの外在的合理主義であることは明らかである．しかしここで問題なのは，合理主義にはこの外在的合理主義しかありえないのか，ということである．モダニストにおいてもポストモダニストにおいても，少なからぬ論者が，それを自覚しているかどうかはともかく，あたかも合理主義といえばこの外在的合理主義しかありえないかのように決めつけている気配がある．もしこのように決めつけてしまうならば，知識や倫理に関する外在的な合理性があるかどうか，ということと，知識や倫理に関する合理性があるかどうか，ということが等置され，ゆえに，知識や倫理に関する外在的な合理性を否定することは，知識や倫理に関する合理性そのものを否定することになる．そして，このように知識や倫理に関するいかなる合理性も否定するのは，語の純粋な意味における相対主義にほかならない．

そうすると次に浮上してくるのは，ポストモダニストははたしてこうした純然たる相対主義を主張しているのか，という問題である．ポストモダニストの合理主義批判を厳しく査読してみるならば，じつはこの点がかなり曖昧であることがわかる．これについては，パトナムの怜悧な洞察力が導きの糸となる．パトナムは，フーコーの相対主義が，しばしばそれと混同されて引き合いに出される相対主義，すなわち文化人類学者などによって論及されてきた相対主義（いわゆる文化的相対主義）とは異質なものであることを正確に見抜いている．ただしここで，文化的相対主義とは，ある特定の文化（概念システム）からみて非合理的であるような知識や倫理も，また別の文化からみれば合理的でありうる，というような意味での相対主義である．つまりこれは，知識や倫理に関する唯一の絶対的な合理性がるのではなく，複数の相対的な合理性がある，という見解である．しかしここで重要なのは，この文化的相対主義は，知識や倫理に関する合理性そのものを否定しているのではない，ということである．つまり，文化的相対主義が主張しているのは，われわれはある特定の文化における合理性の基準を受け入れている，ということ以上でも以下でもない．

ところで，自らポストモダニストと位置づけている論者の所説を吟味しているならば，はたしてこの文化的相対主義以上のことを主張しているのかどうかが定かでないことが多い．すなわち，すべての知識や倫理は状況的，文脈的，歴史的である，といったポストモダニストのお馴染みのスローガンにせよ，それだけではそれが文化的相対主義を主張しようとしているのか，あるいはそれ以上の何かを主張しようとしているのかは判然としない．しかしいずれにせよ，こうした文化的相対主義が反合理主義ではないことだけは確かである．つまり，文化的相対主義は，反外在主義（内在主義）であって，反合理主義ではないのである．

そうすると，この文化的相対主義は，パトナムが提唱するような「内在的合理主義」（パトナムは「内在的実在論」と呼んでいるが）とかなり近しい間柄にあるといえる．パトナムは，ポストモダニストと同様に，外在的合理主義，すなわち知識や倫理に関していかなる観点からも独立な合理性の基準が存在する，という見解をきっぱりと否定する．すなわち，パトナムは，知識や倫理の妥当性はある特定の概念システムに内在的な合理性の基準のもとでしか問うことができない，と主張する．しかしこれは，複数の相対的な合理性がある，ということだけで済ましてしまう素朴な相対主義ではない．すなわち，われわれは，現実には常に，ある特定の概念システムの認識上の諸条件に制約されざるをえないが，あたかもそうした認識上の諸条件に関して理想的な状態がありうるかのようにして，自らの知識や倫理の妥当性を問うことはできる．つまり，パトナムによれば，真理とは，合理的受容可能性の理想化である．すなわち，「われわれは，認識上理想的な諸条件というものがあるかのように語り，ある言明がそうした諸条件のもとで正当化されうるであろう場合に，それを真と呼ぶ」のである．ちなみに，パトナムのこうした内在的合理主義の立場が，ハーバーマスの「理想的コミュニケーション状況」という着想ときわめて類似していることはみやすい．

ところで，パトナムは，文化的相対主義は，それに随伴する多くの概念的混乱を払拭した上でこうした内在的合理主義として解釈されるならば，大いに推奨されるべき見解であるとしている．しかし，この文化的相対主義と純然たる相対主義との違いに関して，パトナムは次のように述べる．「人類学者の観察は歓迎されるべきである．というのは，それはわれわれの文化的優越性という独善的な仮定を攻撃するのに資するからである．しかし，人類学者の議論をフーコーのそれと比較することがまさに，両者の違いを浮き彫りにする．フーコーは，過去の営みはみかけよりも合理的であったと論じているのではなく，すべての営みはさほど合理的ではなく，事実，それらは主に不合理で利己

的な権力によって決められる，と論じている．このフーコーの説とかつての文化的相対主義との間の類似性は，表面的なものである．」（*ibid.*：訳 244-5）つまり，パトナムは，フーコーの議論こそ純然たる相対主義，純然たる反合理主義を表出しているとみなしているのである．そして，パトナムは，こうした純然たる相対主義が「自己論駁的」であることは現代哲学において常識であるという．「クワインとデイヴィドソンは，事実上こう論じた．整合的な相対主義者は，他者を話し手（思考する者）として扱うことはまったくできないであろう（もし彼らの「音声（ノイズ）」がそれほど「共約不可能」であるならば，それらはまさしく「雑音（ノイズ）」なのである），と．他方，プラトンとウィトゲンシュタインは，事実上こう論じた．整合的な相対主義者は，自らを話し手もしくは思考する者として扱うことはできない，と．」（*ibid.*：訳 185）つまり，論証の詳細を跡づけるのは省略するが，パトナムの結論は要するに，「もしすべての『合理的な論証』がたんなる合理化にすぎないのならば，どんな見解を支持するよう合理的に論ずることも無意味となるだけでなく，そもそもなんらかの見解を抱くことすら無意味となるであろう」というものである（*ibid.*：訳 245）．

結局，パトナムは，フーコーの立場は，たんなる相対主義というよりは純然たる相対主義であり，こうした純然たる相対主義のもとでは人間社会は成立しえない，と宣告する．すなわち，「人は相対主義によっては筋を通して生きることができない」（*ibid.*：訳 229）のである．

4.2．フーコーと相対主義

われわれの問題関心にとって，パトナムの以上の議論は示唆的である．どこが示唆的かというと，外在的合理主義であれ内在的合理主義であれ，ともかく何らかの（最低限の）合理主義を堅持する立場と，フーコーの立場とは完全に不親和だ，ということがそこに示されている点である．そしてこれは，ある意味で自明の事柄である．なぜなら，ポストモダニティというのは，モダニティという一つの閉じた宇宙と双生する反宇宙のようなものであり，それは宇宙とは決して接することができず，もし接してしまえば双方とも崩壊するからである．

近代の啓蒙思想家たちは，啓蒙のプロセス，懐疑と反省のプロセスは，それがデカルトのように主体のプロセスであってもヘーゲルのように宇宙のプロセスであっても，最終的には確実なもの，揺るぎないものに行きつく，と固く信じていた．しかし，ポストモダニストが明らかにしようとしたのは，そうしたプロセスには行きつく果てがない，ということ，および，すべての蒙昧さを払拭して完全に啓蒙された理性には底なしの暗闇しか残されていない，ということである．そして，ポストモダニストが訴えるのは，われわれは，もはやそうした赤裸々な事実から目を背けることはできない，ということである．野家の言葉を借りれば，ポストモダンの今日，われわれは「人はいかにして〈無根拠〉に耐えつつ生きることができるのか」を自問していかなければならない，というわけである（野家，1993:324）．

しかし，われわれは，すなわちモダニティの住人は，はたして〈無根拠〉に耐えつつ生きることができるだろうか．それは，おそらくは不可能である．というのも，パトナムの妥協のない論証が示しえたように，モダニティの宇宙の内部では，ポストモダニズムは純然たる相対主義でしかありえないのであって，そうした純然たる相対主義のもとではこの宇宙の住人はお互いにコミュニケーションすることができないからである．そもそも，この宇宙の住人は，ポストモダニズムを生きるということがいかなることであるかを想像することすら不可能なはずである．

したがってまた，モダニティの内部でポストモダニズムを主張するという企ては，パトナムが容赦なく看破しているように，ある種の自己欺瞞（アーペルやハーバーマスがいうところの「遂行的自己矛盾（performative self-contradiction）」）に陥らざるをえない．すなわち，その自己欺瞞というのは，「すべての合理的な論証はたんなる合理化にすぎないと結論づけ，次に，この立場を合理的に論証し始めようとする」（*ibid.*：訳 245）ことである．ポストモダニストは，しばしばこの種の企てを「脱構築」と称しているが，パトナムにいわせればそれはたんなる「欺瞞的相対主義」である．ゆえに，パトナムがいうように，自らの立場を主張しようとするポストモダニストは不誠実であり，逆に誠実なポストモダニストは自らの立場について沈黙せざるをえない．ということはまた，誠実なポストモダニストは，たとえば「平和は戦争より好ましい」というような現実的かつ具体的な判断についても，それを理由づけるというようなことは一切なしえないことになる．「このような判断は，スウィフトが一度も述べなかったのと同様に，フーコーも一度も論じなかった．その理由は同じである．二人とも諷刺家だからなのである．社会的愚行だけが彼らの関心を引き，社会の正気は－それが存在するとき－彼らの関心を引かないのである．」（*ibid.*：訳 250-1）

しかし，パトナムの論難を逆手に取れば，フーコーは，（彼の衣鉢を継ぐと称する多くのポストモダニストとは異なり）少なくとも誠実なポストモダニストであった，ということはできる．実際，フーコーは自らの立場を理路整然と釈明するのを一貫して回避し続けた．また，自らをポスト構造主義者とかポストモダニストとかとラベリングする企てを一貫して斥け，自らの議論が啓蒙主義／反啓蒙主義，合理主義／反合理主義といった不毛な論争に巻き込まれるのを一貫して拒み続けた．フーコーは，結局，モダニティ

の内部には自分の立場というものがありえないことを十分に知悉していたのである.

しかしその一方で，フーコーは数多くの政治的問題にもコミットしようとした．ただしそれは，常に，モダニティの外部からの「雑音」というスタイルにならざるをえないし，実際また，フーコーは自覚的にそういうスタイルをとった.例えば，フーコーはホモセクシュアリティについて，次のように述べている.「同性愛は，関係の，そして感情の潜在的可能性を再び開く歴史的な機会です．それは，もっぱら同性愛者の内在的性質によるわけではなく，同性愛者のいわば『斜め』の位置，社会的生地の中に彼が引くことのできる斜めの線が，そうした潜在的なものの出現を可能にするからなのです.」(Foucault 1984:訳 16) すなわち，フーコーの戦略は，常に，社会の構造化された解読格子に「斜めの線」を引くことであったし，またそうでしかありえなかった．その代わりに，その「斜めの線」がいずれ社会の解読格子になる様態については決して言及しなかったし,また言及しえるはずもなかった.巷間いわゆる「局所的抵抗」のスローガンのもとで奉られるフーコーのこうした戦略の裏側には，フーコーのきわめて自制的な態度があることを見落としてはならない.

4.3. フェミニストはフーコーにはなれない

さてそうすると，ここでポストモダン・フェミニズムの根本的問題がにわかに浮揚してくる．つまり，以上の議論で明らかにされたことは，もしポストモダニズムが近代社会に何らかの作用を及ぼすとしても，それはモダニティの外部からの「雑音」という形でしかありえない，ということである．そのさい，近代社会がそうした「雑音」をどのように処理するかはまったく不確定である．しかしいずれにせよ明白なのは，モダニティの内部において，社会を変革する，すなわちある特定の知識や倫理をしかるべき実践のプログラムのもとで構造化・制度化していく，ということはポストモダニズムにはまったく不可能だ，ということである.

しかし問題なのは，ポストモダニストはそれでかまわないかもしれないが,フェミニストはそれでかまわないのか,ということである．男性性／女性性をめぐるフェミニストの数多くの貴重な知識を，近代社会に「雑音」という形でインプットしてかまわないのだろうか．男女差別をめぐるフェミニストの正当な倫理的見解を，近代社会に「雑音」という形でインプットしてかまわないのだろうか．フェミニストは，近代社会においてたんなる「諷刺家」として扱われてかまわないのだろうか．フェミニストの戦略は，近代社会においてたんなる「局所的抵抗」として握りつぶされてもかまわないのだろうか.

ポストモダン・フェミニストに欠けているようにみえるのは，フーコーのように「それでかまわない」といい切る覚悟である．そのさい，ポストモダン・フェミニストがまず直視すべきなのは，ある特定の知識や倫理にもとづいて近代社会を変革する営みはモダニティの内部においてのみ可能である，ということ，および，フェミニズムにはそれがフェミニズムであるために絶対に譲れない知識や倫理がある，という事実である．ということはつまり，フェミニストは，ある特定の知識や倫理を解体し，モダニティの外部から抑圧的な社会構造・社会制度に抵抗する，という任務だけではなく，ある特定の知識や倫理を確立し，モダニティの内部から抑圧的な社会構造・社会制度を変革する，という任務を引き受けないわけにはいかないのである．そしてそれは，ポストモダニズムが望ましいか否かという問題以前に，そもそもそのような任務を遂行することこそが「フェミニズム」なのである．したがって，はっきりいってしまえば，ポストモダン・フェミニストは，フェミニズムがフェミニズムであるために越えてはならない一線を踏み越えてしまっているのである.

結局，フェミニストはフーコーにはなれないし，またなるべきでもない．ハートソックは，フェミニズムに対するフーコーの議論の意義を認めつつも，フーコーの立場をそのまま受け入れるわけにはいかない理由について，次のように簡潔に述べている.「結局，フーコーは，モダニティの一面的で十把一絡げの否定を，それに取って代わるものが何かに関する構想を明らかにすることなく是認したようにみえる．実際，何人かの論者は，フーコーは基礎づけ主義の根拠もローティのようなリベラルによって支持されている『根拠なき希望』も拒否したがゆえに，いかなる根拠の上に立つこともなく，それゆえまた抵抗のためのいかなる理由づけにも失敗している，と説得的に論証している．要するに，フーコーが示したことは，もしわれわれが抵抗に成功したとしても，われわれはたんに一つの言説上のアイデンティティから他の言説上のアイデンティティに移行していくだけで，また新たな抑圧を生成するプロセスに入って行くだけだろう,ということである.」(Hartsock,*op. cit.*:170)

しかしながら，フーコーは，モダニティの内部からみれば，自らの立場についてそのような理解しかありえないことをおそらくは十分に自覚していた．そして，ポストモダン・フェミニストに必要なのは，そうした苦渋に満ちた自覚である．そうした自覚を欠いたままでは，ニーチェ，デリダ，フーコーといったポストモダニズムの聖者たちを仰々しく引き合いに出しつつ脱構築の言説を繰り広げたところで，その赤裸々な実態はパトナムのいうような欺瞞的相対主義者，すなわち「一方の見解が不合理でなく，もう

一方の見解が不合理であると本当は感じているのに，ある主題について，何か理由を与えるとか，良い理由とか悪い理由といったようなものは，まったく存在しないかのようなふりをする」相対主義者に堕してしまう危険があるのである．

5．おわりに

「ポストモダン・フェミニズムとは，『近代』を獲得することと『近代』を越えることとの二つの課題が同時に問題化されるフェミニズムの地平である．」（金井，1989：iii）しかしながら，フェミニストはそうした地平に立つことはできない．モダニティは，それほど軽々しくその内に立てたり外に立てたりできるようなものではない．ポストモダン・フェミニズムというのは，宇宙の人間と反宇宙の人間が結婚するようなもので，それは空想のお伽話である．

しかし，ポストモダン・フェミニズムという運動が現実に生起したことは確かであり，そこから学ぶべきことは少なくない．まず，近代西欧の啓蒙主義的合理主義は，男性の視点からみればあまり「問題的」ではないのに女性の視点からみてかなり「問題的」である，ということはもはや明らかである．したがって，かかる合理主義が男性性／女性性と深く結びついたものであることももはや確実である．近代社会という大廈高楼の中に安居するモダニストたちにこうした問題を突きつけたのは，ポストモダン・フェミニズムという運動の大きな貢献である．しかし，ハーバーマスが厳しく宣告したように，われわれはモダニティの住人である．したがって，われわれがいま取りかかるべきことは，合理主義を破棄して反宇宙の中に崩壊していくことではなくて，合理性についてのより妥当な言説を構築することである．そして，フェミニストはそうした地道な修築の営みの主役たりうるし，また主役たるべきである．

文　献

江原由美子．1991．『ラディカル・フェミニズム再興』．勁草書房．

Farganis, Sandra．1994．“Postmodernism and Fminism.” in David R. Dickens and Andrea Fontana.(eds.) *Postmodernism and Social Inquiry*. Guilford Press.

Foucault, Michel．1984．“De l'Amité comme mode de vie.” Gai Pied Hebdo 126．＝ 1987．増田一夫（訳）．『同性愛と生存の美学』（第1章 生の様式としての友情について）．哲学書房．

Fraser, Nancy and Linda Nicholson．1990．“Social Criticism without Philosophy: An Encounter between Feminism and Postmodernism.”in Linda J. Nicholson.(ed.) *Feminism/Postmodernism*. Routledge.

Fox-Genovese, Elizabeth．1993．“From Separate Spheres to Dangerous Streets: Postmodernism and the Problem of Order.” *Social Research* 60：235-254.

Harding, Sandra．1990．“Feminism, Science, and the Anti-Enlightenment Critiques.” in Linda J. Nicholson.(ed.) *Feminism/Postmodernism*. Routledge.

Hartsock, Nancy．1990．“Foucault on Power: A Theory for Women?” in Linda J. Nicholson.(ed.) *Feminism/Postmodernism*. Routledge.

Hekman, Susan. J．1990．*Gender and Knowledge: Elements of a Postmodern Feminism*. Polity Press．＝ 1995．金井淑子ほか（訳）．『ジェンダーと知－ポストモダン・フェミニズムの要素』．大村書店．

Irigaray, Luce．1977．*Ce sexe qui n'en est pas un*. les éditions de Minuit．＝ 1987．棚沢直子ほか（訳）．『ひとつではない女の性』．勁草書房．

金井淑子．1989．『ポストモダン・フェミニズム－差異と女性』．勁草書房．

Lovibond, S．1989．“Feminism and Postmodernism.” *New Left Review* 178：5-28.

McNay, Lois．1992．*Foucault and Feminism*. Polity Press.

野家啓一．1993．『無根拠からの出発』．勁草書房．

Putnam, Hilary．1981．*Reason, Truth and History*. Cambridge University Press．＝ 1994．野本和幸ほか（訳）．『理性・真理・歴史』．法政大学出版局．

Soper, K．1989．“Feminism as Critique.” *New Left Review* 176：91-114.

上野千鶴子．1994．『近代家族の成立と終焉』．岩波書店．